『子供たちを成長させる力』

先日、江差町運動公園で中学生の『檜山建設協会杯野球大会』が行われました。生憎の強風で、時折雨も吹きつける中、中学生たちは寒さに負けず懸命のプレーを見せていました。中体連の野球大会は、過去には20チームを超える参加数で行われていましたが、生徒数の減少と学校の閉校や統合のため、年々参加数が減少してきました。今回は中体連大会ではありませんでしたが、4チームという参加数でした。

「勝ちに不思議の勝ちあり、負けに不思議の負けなし」

故野村克也監督の名言と思われがちな言葉ですが、江戸時代の肥前国平戸藩主**松浦静山**が【**常静子剣談**】に記したものだそうです。

「勝ちにあたってはおごらず、負けにつながる要素がなかったかを検証し、負けにあたってはその理由を明らかにし、その要素を取り除き進化するための努力をする。」中学校の部活動において、生徒たちは指導者とともに、目標に向かって技術・体力・精神力を磨いていきます。苦しい時も乗り越えながら、活動を通して生徒たちが身につけていくのは、ただ勝つための力だけではありません。礼儀・忍耐力・相手を思いやる気持ちも仲間と一緒に身につけていきます。中学校の部活動には、そこに大切な視点があります。支えてくれる家族、チームメイト、相手チーム、指導者、大会を運営してくれた方々への感謝の気持ちを持てるチームには、観客を味方にする爽やかさがあります。

さて、大会の決勝戦は、「厚沢部中学校・江差中学校・フェニックスベースボールクラブ」対「奥尻中学校・上ノ国中学校」という合同チーム同士の対戦となりました。単独チームは今金中学校だけで、1つの中学校ではチームが作れない状況があります。フェニックスベースボールクラブには江差北中学校と乙部中学校の生徒が参加しています。

3回までに「奥尻・上ノ国」が5点を先行し、一方的かと思われた試合は、5回終了時には4対5と、両チームとも好機をつかみながらの白熱した展開となりました。どちらに転ぶともわからない内容に、ハラハラしながら観戦させてもらいましたが、試合は1点差のまま終了しました。聞けば、来春に白老で行われる大会への出場権を得る1戦であったということで、敗れたチームの悔しさはいかばかりだったかと思えます。しかし、微妙な判定の際にも選手が正直申告し、相手同士が1塁ベース上でフレンドリーに握手する姿や、試合後に味方を責めることなく相手を称えあう姿には、気持ちの良い爽やかさを感じることができました。

非常に寒く強い風の中、冷たい雨に打たれながらも保護者の皆さんがスタンドから声援を送り、審判の方々はスムーズな進行に尽力されていました。在職中に聞いた「勝ちが選手のお陰、負けは監督の責任」と指導者の放った言葉が強く胸に浮かんできました。選手たちは自分たちを支えてくださった方々への感謝の気持ちを持てたと思います。大会会場には選手たちの心を成長させる力がありました。

国は、学校の働き方改革を踏まえ、休日の部活動を学校から地域へ移行する方策を打ち出し、令和5年度から段階的に実施することとしています。学校現場には懸念と戸惑いがあると思いま

す。部活動の地域移行にあたっては多くの課題がありますが、子供たちの健全な活動を保証しながら、心身を成長させる力を持つ場として創り出していくことが望まれます。

話は変わりますが、数年前、十勝・幕別町で開催された『北海道性教育研究大会』に参加する機会がありました。「性の多様性」という、LGBTQ を題材とした授業を参観しました。当日の朝、信号のないT字路の横断歩道で一時停止し、一人待っていた女子中学生に渡るよう促すと、足早に渡り終えた後振り返って気をつけし、深くお辞儀をして学校へ向かいました。常日頃、自校生徒を自慢していた私は、『うちの生徒たちに負けない生徒だ!』と思い、朝から良い気分になりました。公開授業は、体育館に設営した仮設教室で行われました。大勢の参観者が控える体育館に入ってきた生徒たちは、大きな声で「おはようございます!」と挨拶し、自分の席に向かっていきました。授業は難しい題材でありましたが、しっかりと話を聞き、よく考え、きちんと話し合いができる生徒たちでした。授業のまとめ部分での生徒たちのLGBTQ に対する意見に『大人の概念を変えることが必要で、それには時間を要する』というものがあり、生徒たちの方が現代の持つ課題に順応できているようにも感じました。礼儀正しい言動は心に響くものがありました。**【立ち止まり顔をあげて相手を見るー元気に挨拶するー頭を下げて礼をするー顔をあげて相手を見て歩き始める】**という一連の所作は、高校受験をはじめこれから体験する面接試験において身につけておくべきものでもあり、江差町内の学校を訪問した際に目にも見られます。話す人の方へ体を向け、視線を向けてしっかり聞く姿も見られます。

少し前のことですが、「横断歩道を渡ろうとしている歩行者がいたので車を止めると、江差高校の女子生徒が小走りに渡った後、振り向き気をつけてお辞儀をしたんです。いい子ですよ。」と、話してくれた人がいました。高校生の姿を中学生が見て見習い、中学生の姿を小学生が見て見習います。言い換えれば、尊敬できるたくさんの大人を目にし、影響を受け、育てられ、「工工町、江差」の子供たちは成長していくのだと思います。家庭、地域、学校には、子供たちを成長させる力を持つ大人としての大きな責任があります。その一員として、日々の自分の姿に喝を入れる思いです。